



CONTENTS

教授就任	田中 基・藤谷昌司・井階友貴	2
病院長就任	阿部 孝・横田 徹	6
私の研究から	藤田征弘	10
地域の病院に想う	中山理一郎	12
私の仕事場	岡 徳彦・青木信也・木内久美	14
著書の紹介	伊藤文人	17
開業苦労ばなし	安田 洋・五十嵐知之	18
総会・支部会（滋賀支部）	塩見尚礼・中路景太	20
キャンパスイベント	湖医会賞受賞記念講演会 ほか	22
計報		24
事務局から	総会議事録 ほか	25

教授就任
ごあいさつ

「無痛分娩」って御存知ですか？

湖医会の皆様、こんにちは。医学科12期生の田中基^(たなか もとし)です。平成30年9月1日付けで、名古屋市立大学大学院医学研究科 麻酔科学・集中治療医学分野 周産期麻酔部門 教授を拝命しましたので御挨拶申し上げます。

大学時代はヨット部に在籍し、470級を担当させていただきました。当時、ヨット部には同級生が10名入部し(!)、とても賑やかでした。先輩・後輩との仲も良く、浜医戦や西医体・全医体の遠征は、特に楽しかったです。ヨット部で培った「チームワーク」は、現在の臨床活動にも活かされています。

平成4年に大学を卒業し、麻酔学講座にて天方義邦教授(当時)、野坂修一助教授(当時)より麻酔の基礎を叩き込まれました。現在の麻酔学講座を牽引しておられる北川裕利教授(医11期)はヨット部の1年先輩、高橋完准教授(医12期)は同級生です。研修医時代は、手術室の看護師さんと近江舞子でキャンプをしたり、南紀白浜へ旅行したりと楽しい思い出が一杯です。

卒後3年目から滋賀を離れ、周産期麻酔(産科麻酔・小児麻酔)一筋に活動して参りました。途中、滋賀医大集中治療部にて研修させていただく機会もあり、江口豊講師(当時、医2期)、萬代良一先生(医9期)には大変御世話になりました。カナダ留学中は、湖医会トロント支部会?を開催したことも思い出されます(湖都通信58号参照)。

「無痛分娩」は、私が最も好きな麻酔のひとつです。無痛分娩には、手術にも使う「硬膜外麻酔」という下半身麻酔を使いますが、手術とは異なる麻酔管理が必要です。手術の麻酔では、感覚が完全に無くなる強い麻酔を使いますが、無痛分娩に手術と同様の麻酔を使うと、分娩の進行が止まることや、努責(お腹に力を入れて赤ちゃんを娩出すること)ができなくなることがあります。そのため、無痛分娩では弱めの



名古屋市立大学大学院医学研究科
麻酔科学・集中治療医学分野 周産期麻酔部門 教授
名古屋市立大学病院 無痛分娩センター長

田中 基 (医12期)

麻酔を使いますが、弱すぎると産痛が強くなってしまうので、調整には経験が必要です。無痛分娩により、陣痛で苦しんでいた産婦さんが笑顔に変わると、私も嬉しくなります。産婦さんから「先生が神様に見えました」といわれたことは一度や二度ではありません。ところが近年、無痛分娩に関連する事故が世間を騒がしており、心を痛めています。事故の多くは、産科医が分娩だけでなく麻酔担当も兼任しています。私は無痛分娩の麻酔では、産科医とは別に麻酔科医も配置すべきと考えており、無痛分娩を担当できる麻酔科医の養成を推進しています。

名古屋市立大学では、平成30年12月1日に「無痛分娩センター」をオープンしました。無痛分娩を看板に掲げた大学病院は日本初(世界初?)です。このセンターの目標は、無痛分娩の麻酔管理に精通した麻酔科医、無痛分娩の分娩管理に精通した産科医、無痛分娩の助産管理に精通した助産師を養成し、各専門家間の「チームワーク」の重要性を知ってもらうことです。無痛分娩に興味を持たれた方は御連絡下さい。日本中に安全な無痛分娩を広げる活動を一緒にしましょう!



【略歴】

- 1992年3月 滋賀医科大学医学部医学科 卒業
- 1992年4月 滋賀医科大学麻酔学教室 研修医
- 1993年7月 公立甲賀病院麻酔科 医員
- 1994年9月 国立小児病院(現 国立成育医療研究センター) 麻酔集中治療科 レジデント
- 1997年4月 兵庫県立こども病院麻酔科 医師
- 1998年9月 滋賀医科大学附属病院集中治療部 助手
- 1999年9月 カナダ トロント小児病院集中治療部 見学生
- 2002年3月 国立成育医療センター(現 国立成育医療研究センター) 手術集中治療部 麻酔科 医師(産科麻酔担当)
- 2006年1月 カナダ マウント・サイナイ病院産科麻酔科 臨床フェロー
- 2008年7月 カナダ トロント小児病院麻酔科 臨床フェロー
- 2009年7月 カナダ トロント小児病院麻酔科 臨床講師
- 2010年8月 埼玉医科大学総合医療センター産科麻酔科 講師
- 2012年4月 防衛医科大学校 麻酔学講座 助教
- 2013年4月 聖路加国際病院麻酔科 非常勤医師
- 2016年4月 埼玉医科大学総合医療センター産科麻酔科 講師
- 2018年9月 名古屋市立大学大学院医学研究科麻酔科学 集中治療医学分野周産期麻酔部門 教授
- 2018年12月 名古屋市立大学病院 無痛分娩センター長 兼任

教授就任 ごあいさつ

ごあいさつ



島根大学医学部解剖学講座(神経科学)

教授 藤谷 昌司 (医17期)

この度、平成30年4月1日付で、島根大学医学部解剖学講座(神経科学)の教授に就任しました藤谷昌司(ふじたにまさし)と申します。この場をお借りして湖医会の同門の皆様にご挨拶申し上げます。私は、解剖学講座(神経科学)の教授のみならず、生理学講座(神経・筋肉生理学)の教授も兼任し、両講座を担当しております。

我々の講座は、まず教育においては、医学教育に欠くことのできない解剖学、組織学を発生生物学講座と共に担当し、さらに、単独で神経生理学、神経科学を担当しており、大変な重責を担っております。基礎医学の第一の関門である解剖実習の指導を通じて、倫理観を育み、チーム活動といった学び方の基礎をトレーニングします。講座配属等への協力も積極的に行い、地域医療に貢献する医師や研究に携わる医師といった多様な人材を輩出できる基礎を作る活動に協力したいと考えております。

研究のほうも、まだまだ準備はこれからではございますが、解剖系と生理系の共同研究を活発化させ、より理想的な神経科学の研究環境の構築をめざしたいと考えております。おかげさまでクラウドファンディング等を利用し

て研究資金を集め、臨床講座からの大学院生の受け入れや、諸先生方との共同研究を模索しながら、可能な範囲で大きなテーマを掲げ新しい分野に挑戦したいと考えております。

私自身は、神経系の疾病に関連した病態研究やその治療法の開発をめざし、研究を行っていききたいと考えております。このためには、様々なバックグラウンドを持った研究者・学生さんとともに、遺伝学的、分子生物学的な研究に加え、形態学的、生理学的研究を融合し、多角的な研究活動を行っていききたいと考えております。

また、サージカルトレーニングをサポートし、島根県のみならず日本国中から医師を初めとした医療人、研究者が学びに来る島根大学を実現することに貢献できましたら幸いです。

最後になりましたが、学生時代、研修医時代、大学院時代にお世話になった多くの皆様に改めて御礼申し上げます。皆様のご健康とますますのご活躍をお祈りいたします。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【略歴】

- 1997年3月 滋賀医科大学医学部医学科卒業
- 1997年5月 滋賀医科大学医学部附属病院内科医員(研修医)
- 1998年4月 星ヶ丘厚生年金病院内科医員(研修医)
- 1999年4月 星ヶ丘厚生年金病院脳卒中・糖尿病内科医員
- 2000年4月 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程生体情報・制御専攻入学
- 2004年4月 千葉大学医学研究院助手・神経生物学講座
- 2006年4月 カナダトロント小児病院研究所・博士研究員
- 2010年4月 千葉県がんセンター研究所室長・発生工学研究室
- 2010年11月 大阪大学特任助教・連合小児発達学研究科こどものこころの分子統御機構研究センター
- 2011年4月 大阪大学助教・連合小児発達学研究科こどものこころの分子統御機構研究センター
- 2015年7月 兵庫医科大学准教授・解剖学講座神経科学部門
- 2018年4月 島根大学医学部教授・解剖学講座(神経科学)・(兼)生理学講座(神経・筋肉生理学)

教授就任 ごあいさつ

地域に育てられた10年



福井大学医学部地域プライマリケア講座
教授 井階 友貴 (医25期)

医学科を2005年に卒業しました、井階と申します。この度はこのような機会をいただき、心より御礼申し上げます。2018年度より教授に就任したことを受け、せっかく貴重なページを頂戴しましたので、どこで何をやっているのか、なぜそうなったのかをお伝えしたいと思います。

私は、先般氏名変更の住民投票で有名になりました、兵庫県篠山市の出身で、医療のイメージといえば、個人開業の医院で、待合室がサロン化しているような、地域の生活の密着したどこかあたたかい雰囲気の世界を想像しておりましたので、おぼろげに地域医療への関心は持って進学いたしました(が、学生時代は音楽系クラブ活動にどっぷりで、地域医療の勉強は全く……汗)。滋賀県済生会病院で初期研修の後、一旦内科医への道を志しましたが、中核病院の役割の重要性を痛感しつつも、生活とは切り離された医療に違和感を覚えてしまい、思い切って福井県最西端の高浜町にある町立診療所に赴任しました。するとたまたま、町の危機的な医療状況に対抗するために、高浜町が福井大学に現所属の講座を設立、大学教員として高浜町の医療と健康を守り育てる任務を遂行する立場となりました。それからというもの、町医者的な臨床業務をこなしながら、地域住民の皆さんの主体的な活動を支援するなど、「住民主体の医療づくり」に関わったり、住民や行政、専門職がともに地域そのものの価値を高める会合を主宰するなど、「地域主体の健康まちづくり」に関わったりと、地域そのものに向き合って活動して参りました。研究活動と言えるものではないかもしれませんが、国内外の社会疫学者に指導いただきながら、高浜町でのさまざまな地域活動の効果を評価するための調査を実施しているところです。また、全国の自治体連合制度「健康のまちづくり友好都市連盟」や、各地での多職種連携協働のためのワークショップを主宰させていただき、全国の立場を超えた皆さんとつながりを深め

ています。これらの動きを大学と町に認めていただき、今年度より教授として活動しています。ご関心がありましたら、kenko-machizukuri.net/takahamamodel.pdfもぜひご覧ください。

地域のさまざまなひと、もの、ことに支えられて、とにかく楽しく働いています。福井県といっても、京都府舞鶴市の隣、文化や言葉は関西圏です、機会がありましたらぜひ高浜町にお立ち寄り下さい。皆様、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。



◆赤ふん坊や(あかふんぼうや)
福井県高浜町マスコットキャラクター
昭和63年生まれの元祖ご当地キャラにして、永遠の6歳
住民-行政-医療の協働の象徴として
地域医療たかまモデルを支える立役者

【略歴】

- 2005年 滋賀医科大学医学部卒、済生会滋賀県病院臨床研修医。
- 2007年 「県立柏原病院の小児科を守る会」の活動で有名な兵庫県立柏原(かいばら)病院に勤務、地域医療崩壊の現状を知る。
- 2008年 高浜町国民健康保険和田診療所医師
- 2009年 高浜町の寄附講座「地域プライマリケア講座」助教 兼 同診療所長
- 2012年 同講師
- 2018年 同教授
- 2014年～2015年 ハーバード公衆衛生大学院社会行動科学学部客員研究員
- 2015年 高浜町健康のまちづくりプロデューサーを兼務
住民、行政、医療者が三位一体となった理想の地域医療を追求し、医学教育、住民啓発に奮闘し、研修生や住民の地域医療に対する意識の変化を促している。「たかま地域医療サポーターの会」の立ち上げにかかわり、地域の絆と健康を醸成する活動を研究、高浜の健康やまちづくりを考えるあらゆる立場の者が集まって議論し、実行実現する会合「けっこう健康!高浜☆わいわいカフェ」を主宰する。健康のまちづくりに取り組む全国の市区町村の無条件・無負担のつながり「健康のまちづくり友好都市連盟」事務局を務める。
- 2011年～2012年 トロント大学 Interprofessional Applied Practical Teaching and Learning in the Health Professions修了

病院長就任
ごあいさつ

ご挨拶

はじめに

私は、昭和57年(1982年)に2期生として 滋賀医大を卒業いたしました。滋賀医大卒業後は、大阪大学→大阪港病院→大阪警察病院(内視鏡センター長)→宝塚市立病院(副院長)と異動しました。主に内視鏡診療をしてまいりました。2018年4月よりご縁があって、錦秀会阪和住吉総合病院に入職いたしました。このたび同時期に私を含め、6名の医師(消化器内科5名、消化器外科1名)と2名の内視鏡技師が、赴任しました。2019年3月をめぐりに内視鏡検査をさらに拡充するために機器整備、スタッフの補充、システム改築を進めております。

阪和住吉総合病院 内視鏡センターでは、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸の内視鏡検査や治療。さらに肝臓や胆膵の検査、治療などあらゆる消化器疾患に対する診療を行っております。具体的には、カプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡、食道・胃・大腸の内視鏡治療(ESD)、超音波内視鏡(EUS)、超音波内視鏡化の細胞診(EUS-FNA)、胃術後のERCP(DB-ERCP)などを中心に整備しております。

消化器センターの改修

最近の医療情勢の変化より内視鏡件数の増加に対応するだけではなく、特殊検査への対応など専門性も求められるようになってきました。そのために2018年8月に消化器センターを整備 拡張いたします。内視鏡検査室は4ブースより構成され(他に透視台2ブース)、10床のリカバリ室を備え、外来患者さんに対しても鎮痙剤や鎮痛剤を使用し、「寝ている間」の内視鏡検査を可能としていきます。更に二酸化炭素を送気を使用することで、術中・術後の腹痛や腹満感が軽減され、より楽な内視鏡検査が可能となります。更に従来の空気送気では困難であった術後の食事、検査後可能となります。さらに狭帯域光観察(NBI)、拡大観察による早期癌の診断や内視鏡治療(ESD)等もより充実されます。

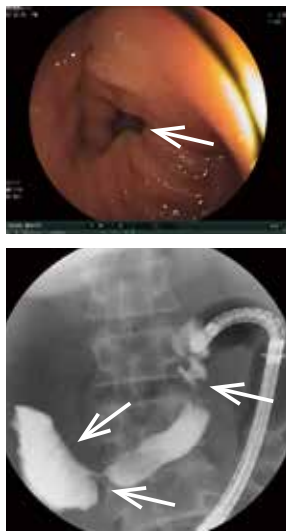


阪和住吉総合病院 病院長 阿部 孝 (医2期)



消化管疾患

食道、胃、大腸等の早期癌の一括切除を可能とした内視鏡的粘膜切除術に対しても積極的に取り組み、高難度症例の場合は他施設エキスパートの医師とも連携して、安全確実な治療に努めてゆきます。カプセル内視鏡については読影のできる専門技師が2名いることで、原因不明の消化管出血に対する緊急小腸カプセル内視鏡にも対応できます。カプセル内視鏡で病変が発見された場合は、必要に応じてダブルバルーン小腸内視鏡検査 (Fig.1,2) を施行できます。術後の癒着などで大腸内視鏡挿入困難な症例にもダブルバルーン内視鏡検査を使用した挿入を行っています。



胆膵疾患

内視鏡的逆行性胆管膵管造影 (ERCP)、総胆管結石に対する碎石処置やステント留置などの一般的な処置に加えて、術後胃などで通常のERCPによるアプローチが困難な症例に対するダブルバルーン内視鏡を使用したDB-ERCP等の高度な処置にも積極的に取り組んでいきます。高難度症例の場合は他施設エキスパートの医師とも連携して、安全確実な治療に努めています。また超音波内視鏡 (EUS) を積極的に使用し (Fig.3)、癌進達度診断や体外式超音波検査では描出困難な膵病変の描出、超音波内視鏡下穿刺吸引術 (EUS-FNA) やドレナージ術等にも積極的に取り組んでいます。



医師募集中

阪和住吉総合病院消化器センターは常に、意欲的な先生を求めています。様々な大学出身者で構成されているため、学閥にとらわれずに診療ができます。診療内容も消化管、胆膵疾患、肝疾患と希望に合わせてバランスの良い研修が可能です。各種専門医の取得にも全面的に協力しておりますので是非ご一報下さい。



住所／〒558-0041 大阪市住吉区3丁目2番9
電話／06-6692-1001 FAX／06-6606-6313

病院長就任 ごあいさつ

ごあいさつ

平成30年8月1日より公益財団法人 豊郷病院の病院長・業務執行理事に就任致しました7期生の横田徹です。この度の病院長就任にあたり、多くの恩師にご尽力いただいたことに、改めて厚く御礼申し上げます。

先ずは自己紹介をさせていただきます。私は、石山の出身でずっと滋賀県で育ちました。私の精神の礎は剣道にあります。小学校のころから大学までとくに運動神経がよかったわけでも身体に恵まれていたわけでもありませんが、剣道だけは続けてきました。滋賀医科大学入学後も剣道部に入部したわけですが、当時、剣道部顧問であったドイツ語の故佐野利勝副学長に教えていただいた言葉に『尚志』があります。尚志とは、孟子の中の一節で人としての心がまえを説いたものです。原文を以下に引用します。

王子塾問曰、士何事、

孟子曰、尚志、曰、何謂尚志、曰、仁義而已矣、

殺一無罪、非仁也、非其有而取之、非義也、居惡在、仁是也、路惡在、義是也、居仁由義、大人之事備矣。

簡単に訳すと、志を尚（たかく）もつとは、仁義に従うこと、つまり、真心と思いやり（仁）を持って、偏らない平常な行いをする（義）が大成する条件であるという意味です。これは剣道の精神にも通じる言葉であり、以来『尚志』は私の座右の銘となりました。『尚志会』は滋賀医科大学剣道部卒業生の会の名前でもあります。

さて、滋賀医科大学を卒業後、当時の第一外科（小玉正智教授）に入局しました。そして大学院に進学、谷 徹先生のご指導のもとエンドトキシンの研究を行いました。その後は臨床を中心に現在まで歩んでまいりました。これまでに何度か大きな転機はありましたが、生来鈍感という私の性格からか、さして深く迷うこともなく、今日まで至っております。今想うと、いつもどこからか、誰かに私の手をひいていただいたように思えてなりません。

今回、私が豊郷病院に赴任する前の2018年5月、学生時代の剣道部の顧問でもあり、当時、豊郷病院の代表理事であった友吉唯夫先生と10数年ぶりにお会いし、夕食を共にしながら、お話をお伺いする機会がありました。このとき友吉先生が心から豊郷病院を大切に考えておられる



公益財団法人豊郷病院 病院長・業務執行理事 横田 徹 (医7期)



ことをひしひしと感じました。その後、豊郷病院への赴任が決まり、赴任前に初めて病院を訪問する1週間前の2018年6月20日、友吉先生が急逝されたのはまさに青天の霹靂でした。亡くなられる2日前にもお電話でお話していました。

改めて、心よりご冥福をお祈り致します。

最後に豊郷病院について紹介致します。豊郷病院の歴史は古く、大正14年に九代目伊藤長兵衛の寄付により設立されました。当初は18床で始まりましたが、現在では一般病棟186床（一般病床105、地域包括ケア病床51、回復期リハビリテーション病床30）、療養病棟32床、精神病棟120床（精神急性期病床60、療養病床60）の合計338床で構成される総合病院かつ、精神科病棟も有する複合病院となりました。法人としては、介護老人保健施設パストラルとよさと（100床）、グループホーム、訪問看護ステーション等の介護事業の運営に加えて、准看護学院と臨床精神医学研究所の教育研究事業も行なっております。勤務いただいている医師の多くが滋賀医科大学の卒業生であり、各診療講座から派遣していただいております。

す。本年4月からは、療養病棟を軽度認知症患者対象の地域包括ケア病棟に転換し、今後増え続ける認知症の診療に対して、地域包括システムを活用することになっております。

病院長就任にあたって心がけていることが3つあります。

- 1) 地域の患者さまへの良質かつ誠実な医療・介護の提供：時代の変化に応じた地域・医療環境のニーズに柔軟に対応します。
- 2) 病院・法人の職員が働きがいを感じる組織づくり：医療人のみならず人としても成長することができる組織づくりが目標です。
- 3) 病院・法人が将来に向けて存続・発展する経済基盤の構築と社会環境の整備：堅実・確実な病院経営と実績を目指します。

友吉先生をはじめ、これまで豊郷病院を築いてこられた先人や湖医会の皆さんに倣い、今も支えていただいている卒業生の先生がたや職員と共に、更に病院を発展させ、湖東地域の医療・介護を担って行く所存です。滋賀医科大学をはじめ、各々の分野、病院で御活躍の皆さまに、今後とも御支援を頂けますよう、心よりお願い申し上げます。



私の研究から

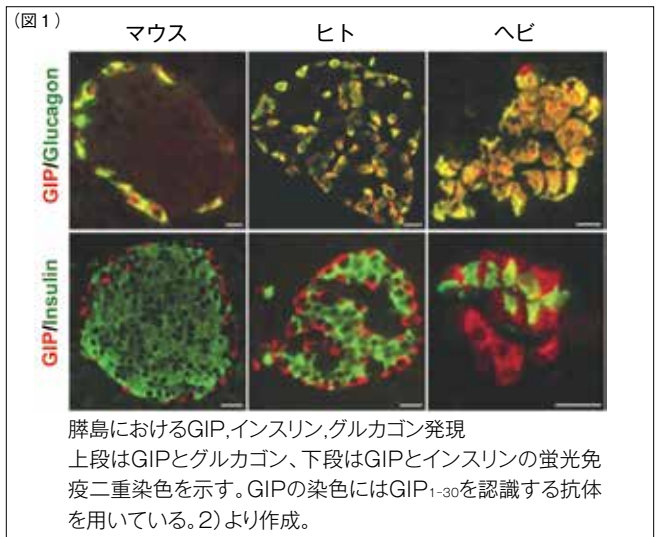
糖尿病と消化管:瀬田、バンクーバー、旭川

このたび、剣道部1年後輩の安田新先生(神奈川県立精神医療センター)から当企画へ寄稿の推薦をいただきました。その前に寄稿されたのが剣道部先輩の片岡英幸先生(医9期。鳥取大学教授)だったと伺い、2つ返事で快諾いたしました。今まで「私の研究から」には先生方の研究への熱い思いが述べられており、大変プレッシャーを抱えながら今原稿を書いています。

最初に研究の真似ごとを始めたのが研修医2年目の秋でした。遺伝性疾患で虚血性心疾患を若年から発症するシトステロール血症という稀な疾患の家族例が通院されていました。一般的な測定法ではシトステロールなどの植物ステロールとコレステロールを区別できず、HPLC法で患者血清をコレステロールと植物ステロールを分別することから学びました。当時はシトステロール血症の原因は同定されていませんでしたが、滋賀医大の症例を含めて全世界の症例が解析された結果、小腸のステロールのトランスポーター(ABC5とABC8)の異常であることが同定されました。

大学院時代は、「小腸からのブドウ糖吸収過剰が2型糖尿病の進展に関与するか」というテーマを頂きました。吉川教授、柏木助教授、日高先生、小島先生(現:再生医学講座教授)、解剖の藤宮峯子先生(現:札幌医科大学教授)の御指導のもと、小腸の過形成とSGLT1(ブドウ糖担体)の過発現が2型糖尿病ラットで糖尿病発症前から認められることを発表しました1)。

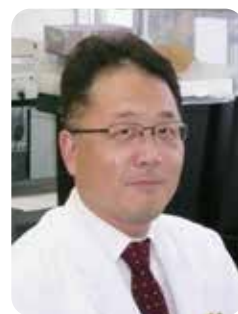
学外臨床研修後、小腸内分泌細胞(K細胞)からインスリンを分泌させることで膵臓のβ細胞を破壊しても糖尿病にならなかったというScienceの論文を読み、発表した研究室を主宰するカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学のKieffer教授のもとで4年余り研究することができました。留学中、消化管ホルモンでインスリン分泌などを促す「インクレチン」特にGIPの遺伝子発現調節・分泌メカニズムの解明に加え、糖尿病に対する細胞治療や遺伝子治療を齧歯類やブタを使って行うプロジェクトに携わりました。その中で、消化管ホルモンであるGIPが膵臓でも分泌され、インスリン分泌調節にパラクラインに関わっていることを報告しました。2) (図1)。



を振り返って

滋賀医科大学 内科学講座 糖尿病内分泌内科・腎臓内科
講師(学内)

藤田 征弘(医13期)

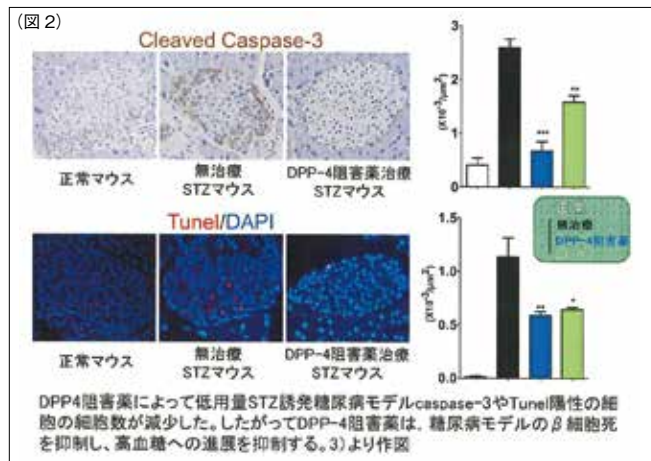


現在もKieffer教授とは大変懇意させていただいており、人生の宝だと思っています。また、来春からKieffer教授のもとへ留学する医局の後輩ができて、大変喜んでおります。

帰国後、第三内科におられた羽田勝計先生が主宰されていた旭川医科大学病態代謝内科学分野へ赴任しました。旭川医大も新設医大で臨床志向の先生が多く、当初は研究に行き詰まっていた。しかし、カザフスタンからの留学生を含む3人の大学院生と共に研究できる機会を頂きました。経口糖尿病薬でインクレチン関連薬であるDPP-4阻害薬が膵β細胞を保護し、膵α細胞増殖を抑えて高血糖への進展を抑制すること3) (図2)、持効型GIP (PEG-GIP1-30)を作成し高血糖への進展を抑制すること4)を報告しました。

この9月より16年振りに母校で勤務しています。これまでを振り返ってみると、研究は「ときめき」と「人との出会い、繋がり」ではなかったかと思っています。

‘De omnibus dubitandum. Dubium sapientiae initium.’
(全てを疑うべし。疑いは知のはじまりである。)をモットーに「糖尿病における消化管の役割」を明らかにする研究を楽しみたいと思います。



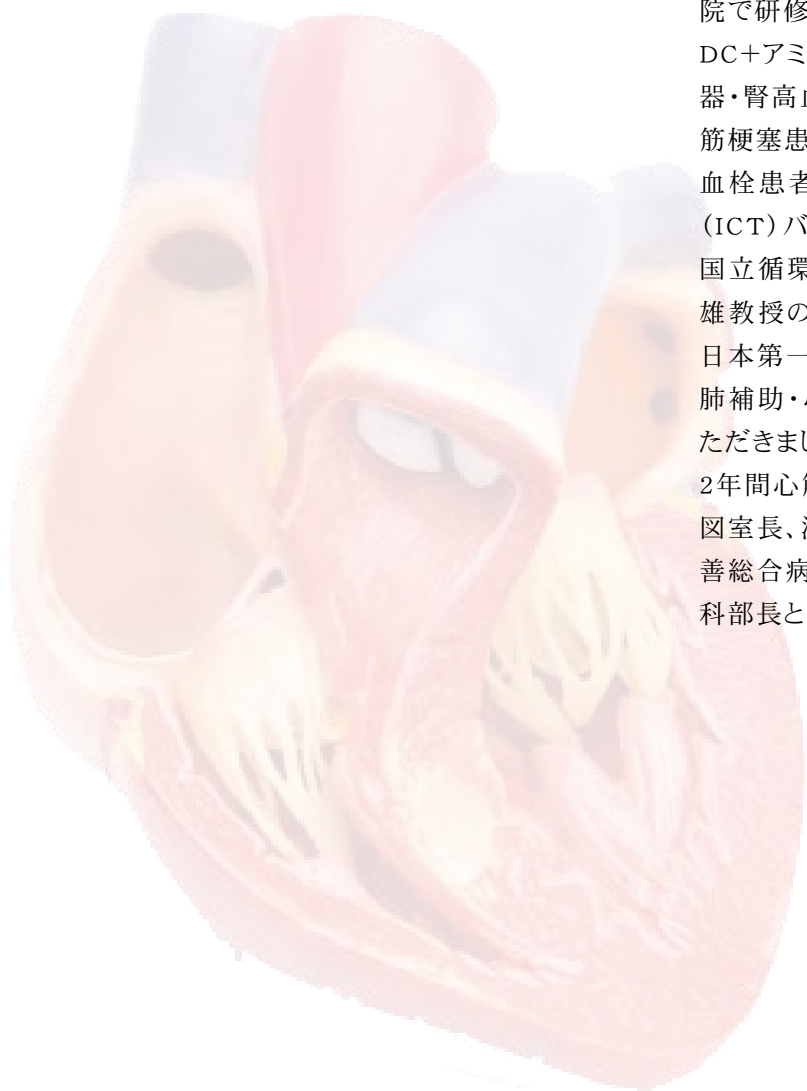
1. Fujita Y, et al. Diabetologia; 41(12):1459-66, 1998
2. Fujita Y, et al. Gastroenterology; 138(5):1966-75, 2010
3. Takeda Y, et al. Diabetologia; 55(2):404-12, 2012
4. Yanagimachi T, et al. Diabetologia; 59:533-541, 2016

地域の病院に想う

循環器内科医、総合内科医として

静岡・杉並・西宮・横浜と親の転勤で転居し、早稲田大学理工学部で機械工学を専攻(サッカー部)しましたが、図学が苦手で1979年滋賀医大に入学(テニス部入部)しました。

医科免疫学に興味を持ち基礎医学に進みたい希望もありましたが、小学校1年の幼馴染と学生結婚し子供ができたこともあって、1985年実家近くの横浜市立大学病院で研修し、その後キューバ人の心筋梗塞にGIK療法+DC+アミサリン・脳出血患者に腹膜透析を経験し、循環器・腎高血圧内科に入局しました。赴任先の病院では心筋梗塞患者にウロキナーゼ点滴を行い、無効でしたが脳血栓患者には有効でした。経皮的冠動脈血栓融解術(ICT)バルーン形成術(PTCA)が始まっていた関西の国立循環器病センター心臓血管内科で先輩の木村一雄教授の後任として1990年から研修させていただき、日本第一例目の冠動脈内超音波・レーザー・経皮的心臓補助・心房性利尿ホルモン投与などを経験させていただきました。翌年、横浜市立大学救命CCU助手に戻り2年間心筋梗塞の治療研究に従事しました。その後心電図室長、済生会横浜市南部病院を経て、現在の国際親善総合病院では循環器内科医長・部長を経て、総合内科部長と20年経過しました。





国際親善総合病院 総合内科部長

中山理一郎 (医5期)

当院は1863年外国人居留民のための公共的な病院として「YOKOHAMA(PUBLIC)HOSPITAL」が欧米人を中核とする委員会によって居留地(現在の横浜市中区山手町)に設立されましたが、戦時中海軍に接收、1945年進駐軍に接收、1946年THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITALに戻され、社会福祉法人国際親善総合病院として再出発し、平成2年神奈川県と横浜市の斡旋により泉区西が岡に泉区・瀬谷の基幹総合病院として新築移転しました。横浜市14救急病院の地域中核急性期病院の一つです。2013年には創立150周年記念会を開催しました。

循環器内科は1966年初代和田敬部長(California Univ.にてPrinzmetalと異型狭心症野研究後帰国し心電図のABCを執筆)。本田守弘(循環器から内科部長:心音図と心エコー研究)。二代目山中修部長(Cleveland ClinicにてSonesから心臓カテーテル法を学び冠動脈の石灰化と狭窄の研究)。私は1998年三代目循環器部長として経桡骨動脈4.2Frカテーテルによる心臓カテーテル法の開発、2000年冠攣縮から心筋梗塞への進展因子の検討、2002年Stent再狭窄予防の検討、2004年Stentエッジ再狭窄



予防の検討、スポーツドクター・アメリカ心臓協会心肺蘇生教育ACLSインストラクターに参加、2008年神奈川県立がんセンター非常勤循環器兼任、2013年ヨーロッパ心臓病学会にて冠連縮型狭心症のニコチン以外のリスクファクターの検討を報告し、2014年から横浜マラソン医療救護委員として心肺停止予防のラピッドレスポンスチームをドクターランナーに依頼、今年1月稲門医学会にてリスクファクターのない若年胸痛の原因としてニコチノイドの関与で優秀演題賞、10月初めて喫煙者ランナーの心肺停止まで発生を阻止してきました。最近は心血管病と癌の共通リスクファクターのデーターを集積しています。

「運動不足と食事内容によって、新しい病気が次々と増加していることが解ってきました。」というのが、最近の心境です。



チーム全体の力で全国トップレベルの治療成績を残す

群馬県立小児医療センター 心臓血管外科部長
岡 徳彦 (医17期)



医学科17期生の岡 徳彦です。留学中の2009年第61号に投稿して以来となります。トロント、メルボルンにてクリニカルフェローとして小児心臓外科のトレーニングを受けた後、2010年に帰国いたしました。神奈川県立こども医療センター、北里大学病院、和歌山県立医大病院を経て、2017年4月から群馬県立小児医療センターに心臓血管外科部長として赴任いたしました。当院は県内で先天性心臓手術を行う唯一の病院として年間120症例前後の心臓手術を行っています。心臓外科チームは私を含め4人ですが、カンファレンス、回診を含めて、手術以外は6人の小児循環器医とともに循環器グループとして診療を行っています。当院は群馬県渋川市にあり、周囲を赤城山や榛名山に囲まれた風光明媚な場所にあります。車で20-30分ほどの距離に伊香保温泉があります。関越道で東京にも1時間30分ほどですので、とても住みやすい環境だと思います。

私が滋賀医大を卒業し医師になった20年前と比べると先天性心臓手術の成績は劇的に向上しました。それでも重症例ではまだ手術死亡率が10%を超えるものもあり、死亡率0%の手術はありません。ま

た手術を要するお子さんを外科医だけで救命することは不可能です。小児科、麻酔科、集中治療科、看護、メディカルエンジニアなどのコメディカルを含めたさまざまな部門との連携があつてはじめてその命を救うことができます。当院は県内だけでなく、ときには新潟南部や埼玉北部のお子さんも紹介いただくことがあります。もちろん県唯一の施設ですので、超重症例も含めてあらゆる先天性心疾患をお持ちのお子さんの手術を行う必要があります。幸いにも診療科長を引き継いでからは、手術死亡、病院死亡、重篤な合併症なく現在にいたっており、全

国トップレベルの施設に引けを取らない成績を残すことができています。これは治療に携わるチーム全体の力であり、この成績を維持するためにも、自分の手術はもちろんのこと、他科との連携、チーム力のさらなる向上に努めていきたいと思っています。

最後に、小児心臓外科医の尊敬する先輩である8期生の猪飼秋夫先生（静岡県立こども病院 副院長）が今年度の湖医会賞を受賞されました。これにより、われわれの分野に興味を持ってくれる滋賀医大の後輩が増えてくれるのではないかと期待しています。



医師としてのロールモデル ～謙虚にタフに～

医療法人 SHIODA 塩田病院 (千葉県)

青木 信也 (医27期)



私は、滋賀県出身で、安曇川高校→滋賀医科大学と進学しました。学生のときから「地域で必要とされる医師」になりたいと思い、進路を悩んでいました。病院見学の際に、人生のロールモデルとなる先生との出会いをきっかけに湘南鎌倉総合病院での初期研修を選び、救急総合診療科に残り、救急専門医を取得しました。初期対応はERがすべて診る方針の病院で、救急車台数も12000台/年(当時)と豊富でした。たくさんの症例を経験したのち、自分の夢へのステップアップとして地域医療の教育病院である北海道最南端、松前町立松前病院で3年半、「なんでも科」として慢性期疾患外来、訪問診療、救急隊への教育、医学生教育、ドクターヘリ勤務と多岐にわたり経験させていただきました。へき地(地域)で働く医療者に求められるスキル・知識は、「ER型救急

で必要とするもの+慢性期疾患+公衆衛生(予防医学)」ではないか感じるようになっていました。その後にRural General Practitioner (Rural GP) が活躍するオーストラリアのへき地で短期研修を行い、その感覚は確信へ変わりました。へき地で働く医師たちが、家族との時間もバランスをとりながら、先の3つを中心に医療を行っていました。

日本のへき地医療の問題はメディアでも取り上げられており、医師確保問題がいつも話題に挙がります。働く医師の専門性・働く医師の家族へのサポートの有無(子供の教育環境など)・24時間365日主治医制によるオンコールシステム(慣習)・医師の教育環境などがありますが、オーストラリアでは「システム(工夫)」でこれらの問題をカバーしていました。

この経験を活かし、この度、千葉

県勝浦市で「地域で必要とされる医師」として楽しく働き、「地域で医学教育をする」環境作りを始めました。仕事とプライベートのバランスを大切に、地域医療に従事しながら、大学の外から医学教育に携わりたいと思います。

今後医療の集約化が進められていく一方で、へき地で必要とされる医療は「救急+慢性期疾患+予防教育」と既存の科では分けにくいものになると予想します。そういう現場で、どんな風に医師が楽しく働いているのか医学生や研修医の先生に早い段階でもっと知ってもらうことで、ロールモデルの選択肢が増えればいいなと願っています。私自身が初期研修時代の恩師からいただいた言葉、「謙虚にタフに」を心に留めながら。



仕事も子育ても諦めない!



木内 久美 (医31期)

こんにちは。医学科31期生の木内(徳世)久美と申します。

3回生の時に結婚し、卒後は主人の暮らす東京都内のJR東京総合病院というところで初期臨床研修をスタートしました。研修開始後数か月して思いがけず妊娠が発覚し、研修2年目すぐのタイミングで長男を出産。多忙な研修医生活と育児との両立は大変でしたが、24時間対応の院内保育園があったおかげで産後8週から職場復帰でき、当直の時も安心でした。2〜3歳ころまではしょっちゅう熱を出すので苦労しましたが、複数のベビーシッター会社に登録し、時には故郷の名古屋から家族に新幹線で上京してもらったりと、頼れるものにはすべて頼りました。また、病院のすぐ近くに住んでいたのでも帰宅後に呼び出されてもすぐに対応でき、長男を背中におぶってカルテを書いたりしていたのも今となってはいい思い出です。都心なので家賃は高く懐具合は楽ではありませんでしたが、やはりこの便利さには代えられませんでしたね。

子育てをしながら忙しい医師業を両立させるには、このような環境調整はとても大事ですよ。でも、それ以上に大切なかもしれないのは、支えてくれている周りの仲間たちへの感謝を、言葉や態度でしっかりと表していくことなのではないか……。今振り返ってみて、そう強く感じます。

女医の妊娠・出産は、他のどの女性とも同様に喜ばしく、もし機会があればぜひ取り組む価値のある事柄です。しかしやはり周囲の方々の協力がないとなかなか難しいこともあるので、「あの人のためなら協力してあげよう」と思ってもらえるだけの働きを普段からしておくことと、自分ができる範囲で周りに恩返しを続けていくことが、円満に仕事を続けていくためには必要になってくるのかなと思います。

無事に初期研修を修了した後はそのまま同院の糖尿病・代謝内科に残らせていただくことができ、尊敬する先輩方や可愛い後輩たちに恵まれ、糖尿病診療にどっぷりと漬かることができました。

現在は、神奈川県の北里大学病院内分泌代謝内科にお世話になっています。2年前に次男が産まれてまだまだ手がかかりますが、こちらには小さな子どもがいるママさんドクターも多く、育児の悩みを共有できたり、子の急な発熱の際には代診しあったりと助け合っています。そして何より、教授をはじめ医局の先生方の温かいご配慮があつてこそ、常勤で働き続けていられるのだと有難く感じています。

これからも色々大変なことがあると思いますが、仕事と子育てのどちらも諦めることなく、欲張りに取り組んでいきたいです。

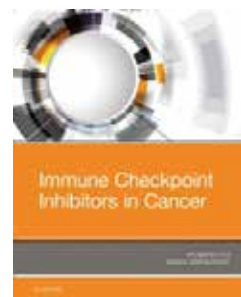




“Immune Checkpoint Inhibitors in Cancer – 1st Edition”



伊藤 文人 (医15期)



大変御無沙汰致しております。滋賀医科大学15期生の伊藤文人と申します。

現在、アメリカニューヨーク州バッファローのロズウェルパーク癌センターにて腫瘍外科及び免疫療法部門に勤務致しております。ロズウェルパーク癌センターは外科医のロズウェル・パークによって1898年に設立されたアメリカで最も古い総合癌センターで、現在も癌治療においてU.S. News Best Hospital Rankingのリストの上位に名前を連ねています。私は腫瘍外科医として、消化器、乳癌の手術をしながら、腫瘍免疫学、特に新規免疫療法の開発と免疫治療の際に治療効果の指標となるバイオマーカー特定を目的とした研究を致しております。

この度、共同編集者・著者として癌の免疫療法に関する書物を執筆し、ELSEVIER社から出版させていただく運びとなりました。私事で誠に恐縮ですが、この場をお借りしてご報告申し上げます。

皆様もご存知のように、免疫療法の一つである免疫チェックポイント阻害剤が、癌治療においてパラダイムシフトを起こしています。この治療法が従来の化学療法、放射線療法、分子標的療法と異なるのは癌細胞を攻撃するのではなく、自身の癌に対する免疫のブレーキを解除するという発想であることです。元来、免疫療法が効きにくいとされてきた癌腫においても完全治癒症例が報告され、抗PD-1, PD-L1, CTLA-4抗体に続き、次世代型の免疫チェックポイント阻害剤も次々と開発されています。その一方で従来の癌治療法とは異なるタイプの副作用等も発生し、腫瘍免疫に関する正式な教育を受けていない医療関係者にとって新たな課題となっています。

本庶佑先生のノーベル賞受賞により、多くの方々に知られるようになった癌免疫療法ですが、私が免疫学の研究を始めた約20年前は著効例が報告されていたもの

の、効果は散発的で、他の癌治療と比べると標準治療法と呼べるものではありませんでした。巻頭の献辞 (Dedication) でも述べさせて頂きましたが、免疫療法を、癌治療において標準治療にまで押し上げることに携わった多くの研究者、研究費用の助成機関、医療関係者、そして治験に参加して下さった沢山の患者様に心より感謝と敬意を表したいと思います。

本庶佑先生と直接お目にかかったことはありませんが、博士研究員としてミシガン大学で研究をしていた時代に「ネットによる公開討論会「独創的研究とは」」という記事を読み、本庶佑先生の研究に対するご姿勢に深い感銘を受けたことを今でも良く覚えております。このサイトは現在でも閲覧可能で、「独創的研究とは」で検索すれば読むことができます。今回、本庶先生の『ノーベル賞受賞』のニュースは、免疫学、免疫療法に携わる医師、又一人の日本人として大変喜ばしく、嬉しい気持ちで一杯であります。

(著者一同) 本書が癌の治療に関わる医師、看護師、研修医、医学生、そして民間企業や大学にて癌の研究に従事する研究者の方々のお役に少しでも立てたらと願って止みません。

Immune Checkpoint Inhibitors in Cancer – 1st Edition
Editors: Fumito Ito, MD, PhD, and Marc Ernstoff, MD
ISBN: 9780323549486
<https://www.elsevier.com/books/immune-checkpoint-inhibitors-in-cancer/ito/978-0-323-54948-6>

Fumito Ito, MD, PhD
Associate Professor of Oncology
Department of Surgical Oncology, Center for Immunotherapy
Roswell Park Comprehensive Cancer Center
Elm and Carlton Streets, CCC-539, Buffalo, NY 14263
Associate Professor of Surgery
Division of Surgical Oncology, Department of Surgery
University at Buffalo, The State University of New York
Jacobs School of Medicine and Biomedical Sciences
fumito.ito@roswellpark.org

開業

苦勞 ばなし

①

目黒通りハートクリニック 院長

安田 洋 (医16期生)



東京で開業をしてみても

みなさま、こんにちは。1996年に旧第1内科に入局し、旧第2生理学教室に大学院生としてお世話になりました。2013年に現在の地に内科開業をしています。諸先輩方がいろんな土地で開業をされていて、苦勞ばなしも多々あるかと思いますが、私が開業している東京都とくに目黒・世田谷地区での開業について皆様の役に立てればと思い報告します。

世田谷区は、どの地域でシミュレーションしても予想来院患者数は1桁台/日で、その隣に位置する目黒区も同様です。銀行は医院開業に関しては積極的に融資をしてくれますが、1桁台/日の来院患者では厳しくなります。もともと家賃が高い地域ですが、バブル崩壊後の東京一極集中で、ますます高騰しています。従業員の賃金レベルも高いのが特徴です。開業後も、レセプトの審査や個別指導は他の道府県より非常に厳しく、医療法人化の手続きも厳しい審査が待っています。目黒・世田谷地区には江戸時代から続く開業医が多く、地元の評判を獲得するのも時間がかかります。これだけ開業しにくい地域であ

るのに、私と同じように全国からチャレンジする医師は減ることもなく増え続ける一方です。保険診療である限り保険点数は全国共通ですから、以上を含めても開業する魅力があるのかどうか問題になります。

問題点ばかり羅列しましたが、良い点としては、教育環境・生活環境が良い、あらゆる最先端の情報が手に入りやすい、などがあります。それ以上に魅力的なのは学閥や派閥による医療の独占がなく、完全に実力主義で勝負ができることです。医師会にかかる費用も安く地域特有のルールもほとんど皆無です。いろんな大学や出身地の医師が区内のあらゆる場所で開業をされ、創意工夫を凝らしてがんばっています。

全国的に若くして開業する医師が増えており、滋賀県内にもその流れが来ているようです。ただ、京都や大阪の大学出身者が多いように思います。滋賀医科大学出身の若い先生たちがもっと滋賀の地域医療を支えるような流れになると良いのではと期待しています。





いがらしクリニック 院長
五十嵐知之 (医23期生)



呼吸器外科医の開業

このたび、守山市に「いがらしクリニック」を開業いたしました、23期生の五十嵐知之と申します。江口先生にご推薦いただき、湖都通信に寄稿させていただく機会をいただいたこと、本当にありがたく思います。開業時の苦勞話などとのテーマをいただいたこともあり、簡単ではありますがお話しさせていただきます。

私は2003年に滋賀医大を卒業後、ストレート研修の最後の世代として、2年間外科学講座で学ばせていただいたのち、呼吸器外科医師として東近江医療センター（旧国立滋賀病院）さらに大学や京都医療センターで仕事をする機会に恵まれました。腰を据えて勤務したのは洛和会音羽病院の呼吸器科勤務です。現在えのきぼり医院を開業された榎堀先生に、呼吸器疾患だけではなく、内科外科救急問わず系統的に学び直す機会をいただき、しんどいながらも今となればとても充実して成長もできた3年間を過ごすことができました。その後大学に勤務（社会人大学院を含む）させていただきましたが、自分の立場や将来の道筋、自分に対する客観的な評価をふまえながら自問自答しているうちに、新たなことに挑戦したいという気持ちが生まれました。結果として、開業後のビジョンが描ける理想的な開業場所（経済的意味も含み）に出会えたことから、周りの皆様の支えもあって思い切って前に進む決断をしました。たくさんの方にご迷惑をおかけすることにもなってしまったのですが、開業後は呼吸器疾患

だけではなく、幅広く内科外科に対応することを目標に頑張っているところです。

開業にあたり、支援してくれる業者はたくさんあり（無料のことが多いです）それぞれメリット、デメリットがあると思います。私は医療コンサルトを通じて開業しましたが、有料だからといって優良であるとまではいいきれませんでした（笑えることも、笑えないことも含め）。しかしながら、自分の目標を体現できる場所を見つけることは当時の私にとっては容易なことではなかったため、医療コンサルタントが足を使ってたくさんの提案をしてくれたことに関しては大いに価値のあることでした。いずれにせよ自分が積極的にかかわることで、最終的には経済的にもスリムになり、設計に関わることができ、満足できるクリニックを作り上げることができたと思います。

開業初日は9月4日の大型台風が関西に猛威を振った日となりました。あまりの暴風で、開業初日なのに午後からは臨時休診!という波乱の幕開けでしたが、休診にも関わらず、夜に台風でケガを負った方からクリニック開けて治療してくれとお願いされ、スタッフもいない中、おろろしながら妻と二人で対応した忘れられない一日でもありました。その後徐々にではありますが、大津・草津・栗東・守山だけではなく、湖南地域、東近江・彦根・長浜からまで、乳幼児やこどもも含めたくさんの方に来院していただけるようになり、やりがいを感じながら充実した毎日を送っています。

まだまだ勉強不足もあって落ち着かず反省の毎日ではありますが、支えてくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。今後ともよろしくお願い申し上げます。



支部会

2018年度 総会・第4回滋賀支部会が開催される



2018年8月26日(日)、ホテルポストンプラザ草津において2018年度総会と第4回滋賀支部会が合同で開催されました。

総会は、永田 啓会長のあいさつのあと、今回は特別に出席いただきました奈良支部代表の横尾 正先生の紹介がありました。議事に移り、2017年度事業報告・決算及び2018年度事業

計画・予算について審議され、それぞれ承認されました。引き続き、20年にわたり会長職にあった渡辺一良前会長に名誉会長の称号と感謝状が授与されました。

滋賀支部会は、前川 聡支部代表からあいさつと、本年4月に理事・副学長に就任された永田 啓先生の紹介があり、お祝いの花束が贈られました。滋賀の話題として「県病院協会の役割について」(東近江総合医療センター院長 井上修平先生)、「県の医師会、女性会の動きについて」(きづきクリニック院長 木築野百合先生)、「県内の小児科の現状について」(滋賀医科大学小児科学講座教授 丸尾良浩先生)、それぞれ報告いただきました。

懇親会は、渡辺名誉会長の発声による乾杯で始まりました。参加の皆さんからの近況など興味深い報告は、タイムキーパーの活躍もあって大いに盛り上がりました。



湖医会総会、滋賀支部会に出席して



長浜赤十字病院 副院長(兼)
第一外科部長

塩見 尚礼(医11期)

2018年度の湖医会総会、滋賀支部会が8月26日に同時開催された。同窓会がどのような活動をされているのか知りたかったのだが、実はこれまで出席したことはなかった。湖医会の目的は「会員相互の親睦を図るとともに滋賀医科大学の発展、医学の進歩に寄与すること」、とある。事業内容をみると湖医会賞の選考、授与のほかは奨学金や部活動に対する学生活動等の補助が予算額をみてもメインであり、これら卒前の学生に対する事業については一定の成果を得ているものと思われた。

また、事業のひとつに滋賀医大関連病院長会議への出席とある。会議でどのような発言をしているのか大変興味がある。大学の外にでると、滋賀医大が設立されて卒業生

が出るまでは、近隣の大学に滋賀県の医療が支えられていたということがよくわかる。最近では滋賀医大卒業の医師が増え、開業される先生達が増えてきたこと、医師会でも卒業生の活躍を直接目にする機会が増えたことは県病院協会、県医師会活動に参画されている井上先生、木築先生からのご講演でもうかがい知ることができた。

一方で大学病院以外の個々の地域の病院(関連病院)からみると、医師の派遣という点が重要となってくるが、つきつめていくと単一講座からだけでなく、講座同士の連携、大学全体としての対応が大切になってくると思われる。そのような時に同窓会が果たす役割は大きいのではないだろうか。質疑応答の場で、永田 啓会長が今後の同窓会のあり方について考えていかなければいけない、という話をされた。個人的には卒後の会員、卒業生の利益となるような地域医療、大学運営に対して「ものを言える団体」になればよいな、と思っている。そういう点で参加者が少ないのは残念であった。今後の動向に注目したい。

最後になったが、やはり懐かしい先輩、同期の先生にお会いする機会を得たのはとても良かったし、力を得た。多忙な中に活動してくださっている幹事の先生、事務方に感謝申し上げます。

この度、湖医会総会および滋賀支部会とそれに引き続き懇親会に参加させていただきました。懇親会では、美味しいお酒をいただきながら先生方とざっくばらんに会話を楽しむことができ、普段の大学ではなかなかできない率直な意見交換を先生方と直接できる良い機会でした。

湖医会は学生にはあまり関係ないと思われる方もおられるかもしれませんが、むしろ学生にとって有益な機会なのではないかと参加してみて感じました。滋賀医大の卒業生は、いまや海外も含め全国のあらゆる場面でご



中路 景太
(医学科4年)

活躍されており、湖医会ではそういった先生方とつながる機会にもなりますので、将来のいろいろなキャリアを考えている方にとっても有意義な機会ではないかと思えます。また、卒業生の先生方は、後輩のためにサポートをしたいと考えてくださっているの、なにか困っていることがあれば先生方が親身に相談に乗ってくださいます。これまで湖医会をよく知らなかったという方も、ぜひ一度気軽に参加してみたいかがでしょうか。



第 20 回 関東支部会に参加して

木谷 勇一（医 5 期）

平成 30 年 8 月 18 日（土）に第 20 回関東支部会が品川プリンスで開催されました。今回は二十数名の参加者がいました。この会の前身の関東会は、医 1 期生の久保田亘先生（現平塚医師会会長）中心とする卒後関東地方にいる仲間により設立されたと聞いています。その後 20 回も続いているのには幹事の多大な努力の賜と考えています。



前回までは、滋賀医大出身で各所にて活躍されている先生の学術講演後に歓談するパターンでした。しかし今回は、学術講演よりエンターテイメントに舵を切り、医 2 期生の加藤正二郎先生の落語と医 3 期生の下田和孝先生率いる Kazzfest によるバンド演奏を楽しませていただきました。趣味を謳歌されている元気な先輩達の姿を見ると、少し元気をもらった気になります。更に保健管理講座の山川正信先生（現宝塚大学学長）の近況報告もあり、参加者同士の歓談あり、盛り沢山の内容を楽しんだ後、閉会となりました。

戸叶 達夫（医 8 期）

今回は 20 回目を記念してのスペシャルショー。5 期生中山先生の司会でスタート。まず 1 期生久保田先生のご挨拶に続いて来賓の宝塚大学学長山川正信先生（元滋賀医大保健管理学講座）から国立と私立大学との経営、教育等の違い難しさについて深いお話をいただきました。

引き続き本日のメインイベント 3 期生下田先生率いるバンド Kazzfest のステージ！

錦糸町のライブハウスにも夜な夜な出没されているという本格派。バラードからハードロックまでまさしく魂に訴えかける演奏、なかでも私が感激したのはアンコールで演奏していただいた共演もされているというあの王様！の『直訳スモークオンザウォーター』でした。王様まだ健在なんですね。同期の〇〇先生に捧げた？『ずっと好きだったんだぜ』 耳に残っております。



トリは 2 期生加藤先生（プラザ亭一夜師匠）による落語、時事ネタから古典さらにはアンコール噺まで大いに笑わせていただきました。まさしく湖医会の立川らく朝でした。

42 期生の学生さんも数名参加されており世代の隔たりに時代の流れを感じましたが、大先輩の先生方から明日へのパワーをいただいた会でした。加藤先生曰く、10 年後の第 30 回記念同窓会での再演を今から楽しみにしております。ありがとうございました。



村石 宇内（医学科 5 年）

「湖医会」関東支部会に参加し、とても楽しい時間を過ごすことができました。初めての参加で、会場のホテルも立派なこともあり、少し緊張して向かったのですが、先生方から気さくに声をかけて頂き、リラックスすることができました。下田先生のバンド演奏や加藤先生の落語を鑑賞し、先生方からお話を伺っているとあっという間に終了の時間となってしまいました。関東の病院や研修医生活についてまだまだお聞きしたいこともありましたが、次の機会にと思っております。ありがとうございました。



小林 裕幸（医学科 4 年）

関東支部会に参加させて頂き、誠に有難うございました。先生方によるバンド演奏や落語で非常に盛り上がり、美味しい中華料理を頂きながら楽しいひと時を過ごすうちに初参加の緊張も消えていました。多くの先生方が、学生の身分である私にも声をかけてくださり、滋賀医大の温かいつながりは卒業してからも変わらないということを実感しました。



私は、関東の出身ですので、今後もお世話になるかと思いますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

中山 景樹（医学科 4 年）

生演奏のライブと面白い落語により、とても充実した時間を過ごしました。私は学部 4 年であり、会の中で孤立するのではないかと恐れていましたが、壇上で自己紹介をする機会があったり、先輩方が積極的に話しかけてきて下さったり、おかげでその様な心配は全く不要でした。



また機会があればぜひ参加させて頂きたいです。ありがとうございました。

お詫び：

第 20 回関東支部会記念大会の報告は、湖都通信 82 号に掲載予定しておりましたが、掲載できておりませんでしたので、お詫びしてここに掲載させていただきます。

キャンパスイベント



第17回湖医会賞受賞記念講演会

2018年10月27日、若鮎祭実行委員会との共催で第17回湖医会賞受賞記念講演会を開催しました。講演に先立ち、今回の受賞者、静岡県立こども病院副院長の猪飼秋夫先生(医8期)に永田会長から賞状及び副賞が授与されました。

「外科医を育てる ー自分の足跡を振り返ってー」と題した講演に、参加者からの多数の質疑があって、猪飼先生には丁寧に対応していただきました。



若鮎祭「模擬店グランプリ」に協賛

第44回若鮎祭は、10月27日、28日に開催されました。湖医会は、学生の企画による「模擬店グランプリ」を協賛し、上位入賞のクラブに永田会長からトロフィと賞品が授与されました。

1位…バドミントン部

2位…ワンダーフォーゲル部

3位…水泳部



納涼企画を開催

暑い季節に試験勉強を頑張っている学生に「涼」を届けようと生協との共催企画として、7月13日、17日の2日間、「かき氷」、「いちごアイス最中」、「イチゴあんみつ」の販売を行いました。



餅つき大会を共催

12月14日、昨年に引き続き生協との共催で「餅つき大会」を福利棟食堂ホールで開催しました。相見副会長のあいさつで始まり、138名もの参加もあって、賑やかに交互に餅をつき出来上がった餅に舌鼓を打っていました。



訃 報

謹んで哀悼の意を表します。

平成31年1月10日 前田 博明 (医1期)

2019年4月より

湖医会ポータルサイト開設

カレンダー機能、コミュニティ、情報交換、同級生や会員への近況報告などの情報発信、
質問コーナー、就業支援、大学の情報発信など

会員にはIDを配布 登録にてすぐに利用可能!!

問い合わせ／e-mail : koikai@koikai.org

湖医会広報

2018年度「湖医会」総会 議事録

- 日時／2018年8月26日(日) 17:30～18:30
- 場所／ホテルボストンプラザ草津 ケネディルーム

議 題

1. 2017 年度事業報告及び決算見込について
原案(資料1-1、1-2(1)、(2))のとおり承認された。
2. 2018 年度事業計画及び予算について
原案(資料2-1、2-2)のとおり承認された。

※ 各資料は「湖医会」HP を参照

会員の現況 (2/1現在) 総数 6,634名

- 卒業会員 { (学 部) 5,136名 (医 学 科 3,708名
看護学科 1,428名)
(大学院) 14名
- 学友会員 ————— 92名
- 在学会員 1,085名 (学部: 966名、
博士: 99名、修士: 20名)
- 特別会員 ————— 307名 (元職員240名
現職員 67名)

年会費について

医学科卒業会員・特別会員・賛助会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

医学科卒業会員

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の
自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。
なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は
事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になっ
た場合は、メールまたはファクスで事務局
までご連絡ください。



表紙の写真：中庭から一般教養棟・基礎研究棟 (撮影：学生写真部)